

学長室だより

2019.01.21 NO.14

4 国公立大の連携

秋田には大学などの高等教育機関が14校ある。それぞれの学長は日ごろから、学校の運営に腐心している。

大学間の横のつながりも大切だ。全国の学長会議だけでなく、地域の大学間で意識的に連携を取り合う。例えば、教員たちは非常勤講師として他大学に出向き、講義を行うなど互いに助け合っている。秋田県には大学連携組織「大学コンソーシアムあきた」があり、国公私の大学・短大・専門学校が加盟している。そこでは、単位の互換、学生交流、学術研究、教職員の研修、高校との連携など様々な活動の枠組みがあるが、その実態は目標とするレベル・内容に達することは容易ではない。

そうした中、四つの国公立大学（秋田大学、秋田県立大学、秋田公立美術大学、国際教養大学）の学長たちは年に2回、各大学の状況や大学間連携について話し合っている。4大学は総合系、理系、美術系、国際系とそれぞれに特徴と強みを持ち、競合することも少ないので、協力しやすい側面がある。

4大学長のお付き合いと言え、会議だけではない。「お堅い」といわれがちな学長たちも内実を言えば、カラオケが大好きだ。私たちは定期的な会合が終わると、夕食をともにし、そして誰から誘うともなくカラオケに足が向く。

考えてみれば、我々が10代や20代のころは、歌声運動や歌声喫茶などが人気の時代。見知らぬ仲間同士でもコーヒー1杯で何時間も合唱したものだ。今ではカラオケがそれにとってかわったが、人前で一緒に歌を歌うというのは昔から、羞恥（しゅうち）心が強いといわれる日本人にとって大きな特徴で美点でもある。

得意とするレパートリーは4人それぞれ。各自が自分の持ち歌を繰り返し歌うのだ。かくいう私の持ち歌は昭和30～40年代の演歌。米国の大学で教壇に立っていた約40年前、米大陸を横断する長距離ドライブで、真っすぐなハイウエーを飛ばしながら眠気覚ましに大声で歌っていたのが、三橋美智也の「おんな船頭唄」と森進一の「命かれても」だった。

今、カラオケを歌いながら脳裏に浮かぶのは、あの米国中西部の無人の大平原と50年前の日本の演歌との組み合わせだ。よく、自分の国を離れて初めて母国の文化や食事の良さを改めて認識し、一種、愛国的になるというのは本当だ。留学先での演歌などというと不謹慎に聞こえるかもしれないが、私にとっては、自分の中での異文化統合の極だったのである。

ともあれ、日本でも大学間合併などが現実化しつつある中、4大学の協力で秋田の高等教育をさらに発展させたい。個人的には、4大学の学生が自由に他大学の魅力ある授業を求め、「渡り鳥」のように受講できる枠組みが出来ればよいと思っている。

注) 朝日新聞秋田版「あきたを語ろう」からの転載です。以下 URL からもご覧いただけます。

<http://www.asahi.com/area/akita/articles/MTW20190121051550001.html>



鈴木 典比古

President Norihiko Suzuki, DBA